

「生存圏研究」巻頭言

生存圏研究所は、京都大学の三大キャンパスの一角を占める宇治地区にあった木質科学研究所と全国共同利用の宙空電波科学研究センターが発展的に再編統合され、新しい理念のもとにできあがった研究所です。再編統合の際には構成教員全員が33回、慎重に議論を積み上げ、新学術領域として「生存圏科学」を目指すことになりました。ともに、人間の生存に必要な科学技術への展開を視野に入れていたので、人類の生存環境を三次元的に捉える「圏」という観点を導入する生存圏研究所への移行は潤滑に行われました。平成16年4月より京都大学が国立大学法人になり、新たに与えられた裁量権を生かし、法人化と同時に独自に発足させた第一号の新生部局が当研究所となりました。その概念は人類の生存する領域「生存圏」の現状と将来を学術的に評価・理解を深化させるとともに、新たに生存圏を開拓、創成するための先進的技術開発を目指すことを基礎に構築されました。その意味で、生存圏研究所のミッションは社会的要請を背景に、21世紀の最大課題である人類の生存と反映を脅かす諸問題の解決に取り組むことです。そのために、従来の学術分野である農学、木質科学、生命科学、電子工学、通信情報学、宇宙・地球物理学などの多様な背景を持つ研究者が中心となり、新しい生存圏科学を創成し、京都大学附置の全国共同利用研究所として学術界、一般社会に貢献してゆくことになったわけです。所員一同が堅い決意と深い信念に基づいて臨んだ文部科学省の学術審議会学術推進部会の審議を無事通過し、平成17年度から生存圏研究所は大学附置全国共同利用研究所として正式に認可され、初代所長には筆者が就任致しました。

当面は下記の4つのミッションを掲げ、全国、世界の研究者とともに鋭意取り組みます。

(1) 環境計測・地球再生；地球大気グローバルかつアクティブな観測研究と技術開発、森林圏生命科学、木質資源保全回復研究により、環境計測と地球再生の科学を推進し、生存圏の保全と再生可能な循環型社会の構築に貢献します。(2) 太陽エネルギー変換・利用；宇宙で無尽蔵に得られる太陽エネルギーを電波で地上へ持ち帰る宇宙太陽発電所の研究と木質系バイオマスのエネルギー・化学資源変換の研究を中心に、太陽エネルギー変換・利用手法について多角的、戦略的に研究を進め、炭酸ガスを出さない太陽エネルギー依存型循環社会の基礎構築に貢献します。(3) 宇宙環境・利用；宇宙環境の探査・利用技術の開発、宇宙からの地球・電離圏観測、それらに関連する計算機実験と共に、宇宙環境下での木質素材の利用技術の新開発を行い、人類の生存圏の拡大に貢献します。(4) 循環型資源・材料開発；生存圏における炭素および水の循環連鎖をレーダー観測し、それと関連させた木質資源の持続的・循環的利用技術を開発して、21世紀型資源循環システムの基礎構築に貢献します。

この度、京都大学生存圏研究所発行の和文雑誌として、生存圏の研究に関する研究成果ならびに同研究所に関連する研究活動の報告を目的として本誌を発刊する運びとなりました。本誌は所内に設けられた生存圏研究所広報委員会の編集のもとで年1回、毎年1～3月頃に発刊の予定です。本誌の内容は大別して(1)総説記事、(2)共同利用報告、(3)研究資料、および(4)研究業績紹介となります。

今後、研究所の顔として本誌が長らく愛読され、学会並びに社会に利用されることを望んで巻頭言と致します。

平成18年春

生存圏研究所初代所長（現、京都大学理事・副学長）

松本 紘